

think-mie

創刊号

地 元

目 次

巻頭言	3
「ホームドクター」の役割 ニューヨーク大学行政研究所上席研究員 青山公三氏	
鼎 談	4
日本開発研究所三重の20年	
「住民に見える」市町村合併の 議論に向けて	吉田昌弘 8
ブロードバンド普及元年における 地域情報化の課題	庄司勇木 10
まちを見つめる	12
関町「関宿」	嶋村明彦氏
尾鷲市「熊野古道」	川端 守氏
浜島町「伊勢エビと温泉の町」	谷水金岩氏
住民と行政がともに行動を	八橋隆之氏 18
日本開発研究所三重のこだわり	19
「日本開発研究所三重」への期待	田畑美穂氏 22

表紙：「はな2000」高北 幸矢氏 シルクスクリーン

「ホームドクター」の役割

ニューヨーク大学
行政研究所上席研究員
青山公三氏

私が前所長の庄司さんに最後にお会いしたのは、確かもう10年以上前のことである。当時三重県の関連の仕事で一緒させて頂いたと記憶している。その頃、庄司さんと会えば、いつも東京の大手シンクタンクの地方での仕事振りの話になった。「彼らは地方でいいかげんな仕事をして逃げるが、俺達は逃げられない。いつも真剣勝負だ」とよく言っておられた。その庄司さんの訃報をお聞きしたのは21世紀になってからであった。大変貴重な「同志」を失ったような気持ちである。10年近くも日本を離れている私が「同志」などというのは、庄司さんからお叱りを受けてしまうかもしれないが、私の気持ちの上では、地域を思う「同志」を失って本当に残念でならない。ご冥福をお祈りしたい。

私が1992年に渡米して以後の研究所の足跡を見せて頂くと、着実に三重県における、「まちづくり、地域づくりのホームドクター」として足場を固められてこられた様子がよくわかる。前所長の庄司さん及びスタッフの皆さんによる地道で根気あるご努力の賜物と思う。「ホームドクター」は単に患者の悪いところを治すだけでなく、患者の健康に関わる全ての情報を蓄積し、健康管理や健康増進についてのアドバイスもする。患者の家族全員の健康についても同様である。そんな役割を三重県の中で定着させてきた研究所の皆さんのご努力に敬意を表するとともに、今後もその役割をますます発展させて頂きたいと思う。

ただ、「ホームドクター」は、まちのこと、地域のことだけをわかっていれば良いわけではない。常に国全体の動き、国際社会の動きなども的確に把握している必要がある。言い古された表現だが、「Think Global, Act Regional」の精神が必要だ。そのために私が庄司さんの「同志」として、アメリカから何か少しでもお役に立てることがあればこんな嬉しいことはない。また今回、庄司さんの一周忌を機に、ニュースレター（社外報）を出されるとのこと、研究所の情報発信をするだけでなく、皆さんが足でかせいだ情報を埋もれさせないためにも、ニュースレターを貴重な道具として使って頂きたいと願っている。



日本開発研究所三重の20年

地元コンサルタントとしての安心感



津市千歳山にある庄司邸での鼎談

先ず日本開発研究所三重の創業当時のことからお話しいただきたいと思います。

庄司 昭和46年に、京都市の富家建築研究所が子会社として、都市計画部門を担当する「日本開発研究所」をつくり、前所長が移ったのがスタートです。

当時手がけていた仕事は、千葉ニュータウン、成田ニュータウンなどの地区計画、近隣サブセンターの基本計画など。そして、三重県の「勤労者憩いの村」のマスタープランで三重県とかわり、その時、今日ご出席の富田さんたちとの出会いが始まったわけです。

昭和55年に、京都の日本開発研究所が休業することになり、庄司の郷里の三重県へその仕事を引き継ぐという形で、新しい会社を起すために帰ってきました。

創業者であり、前所長の庄司博彦は松阪市出身ですが、やはり県庁所在地ということで津に事務所を持ちました。地方都市では都市計画、地方計画で食べていけるという自信がなく、特にそんな仕事もあるのかなという不安だらけでした。「エイや」という感じでやり始めました。庄司のパイオニア精神とでもいのでしょうか。

やはり、都市計画、地域計画という仕事にお金を出すと感覚があまりなかったですから、なかなか仕事がなかったんです。みなさんのご支援でなん

とか頑張らせていただけたな、と思っています。

今井先生に、庄司さんとの出会いと、地方でのコンサルタント業について、どう思われましたか。

今井 開業された翌年、私は56年に教官として三重大学に来ました。私も当時はまったく三重県、津市のことを知らなかったのですが、三重県にこういう人がいてコンサルタントがちゃんとあるんだという安心感を持ちました。私は建築計画が専門で都市計画が専門



三重大学工学部教授
今井正次氏

ではなかったのですが、多少興味は持っていました。「こういう話があるから一緒にやらないか」とお誘いいただいたんでしたかねえ。飯高町の計画の話が一番最初でした。

庄司 確かに、あれが大きな仕事の始まりでした。

今井 一緒にやらないかと言われても、私は飯高町の名前すら聞いたことがない。いろんなことを教えてもらいながら、当時は津港のそばにあったマンションの一室の事務所へ遊びにいったりしていましたね。

庄司 開業してから4年間は、私と庄司と2人だけで仕事をしていました。

富田専務さんはいかがですか。



津駅前都市開発株式会社
専務理事 富田 茂氏

富田 田川亮三さんが知事になられた時、勤労者のための保養施設をつくるのが公約だったんですね。ところが場所をどこにするかということで4か所候補がありました。その4か所の比較検討をコンサルタントに

してもらおうという話になって、青山高原、伊勢市朝熊山、紀伊長島レク都市、大王町登茂山について、一か所ずつ比較検討することになりました。京都に出張して、おいしいそばをいただいたなあというのが記憶に残っています。

庄司さんは、私の5年下級でした小学校の時からずっと級長をしていた。ガキ大将ではなく秀才のほまれ高い少年だったことを覚えています。非常に物静かな方で、じっくり構えておられたということが一番印象に残っています。高邁な議論ばかりする人が多いコンサルの中で、地道に調査から入られて、そこが庄司さんの人柄というか、仕事への取り組み方がきちっと出ていたのではないのでしょうか。夏の暑い日に、現地調査でよく山歩きをしましたね。観光振興だ、リゾート促進だという時代。これまであったものを壊して次々鉄筋コンクリートを建てていくというのがあの当時の風潮でした。そう思うと、それを乗り越えて今の時代がある。ものすごくこの20年の間に変化があるんですね。

そんな時代の流れの中で、コンサルというものが三重県にもあったということ。庄司さんは正に草分けであったと思います。

今井 確かに、県単位では、愛知県、大阪府、京都府などを除いて、それ以外にはないですね。

庄司 民間では三重県でももちろん初めてですし、滋賀県、岐阜県には公的なものはありましたが、民間ではないです。名古屋市も地域問題研究所が初めてですからね。

コツコツと積み上げていく計画づくり

今井 飯高町はかなり参加させていただいて、蓮ダムの形すらない時期で、できたらどうするかという話だったんですが、今考えれば、良いところにプロジェクトを立ち上げたという思いがします。とにかく自然はあるけれどもそれ以外に何も無いという場所で一体どうするか、どうやって取り組むのかというようなことでした。高度成長の匂いがまだあったところで、何か持ってくる話が一番簡単で、短絡的にで

きるところを、そうではない話でとにかくまとめようとしたところが、庄司さんのすごいところでした。

地道に小さい観光資源、自然資源、人文資源という形で整理して並べるなど、なるほどと思ったりもしました。

三重県が好きになった一つの理由は、飯高町の計画づくりであったと思います。ああいう所へ行かせてもらって、小さい開発をうまくつなげていくという手法を勉強しました。

庄司さんは、立板に水のごとくしゃべるのではなく、とつとつとお話になるのがまた逆に説得力がありましたね。

富田 トーンが上がるわけでもなく、始めから終わりまで非常に低い声で話された。私はむしろ迫力を感じましたね。

今井 計画には絵を描いただけのものが多いのですが、飯高町の場合は、8割以上が実現していると考えてよいのではないのでしょうか。計画に批判的な人が会議に参加していても何も言えないほど、積み上げていく手法には説得力がありましたね。あの計画は、形が変わったものもありますが発展的に変化した形であって、私たちが話題にしたアイテムはなんらかの形で今実現しています。

コンサル業は建築事務所とは違って、完成感、達成感というものがなかなかないんですね。レポート書いて終わりみたいなのところがありますから。それだけに飯高町の時は、庄司さんとしてもあれ以上やりがいのある仕事はなかったのではと思います。私は少し手伝わさせていただいただけでも非常にうれしく思いました。あの達成感は、コンサル冥利につきると感じる感じだったのではと思います。

四日市の研究学園都市構想にもかかわりました。

今井 あれはかなり毛色が違う話でした。日本開発としては、飯高町のような「法定計画」ではない所での仕事の方が能力を発揮できるという感じがしました。あの仕事は方針・ラインが先にあって、それにうまくのせなければならぬというところがありましたから、本当のコンサルのストック、モチベーションをうまく生かす仕事ではなかったと思います。そういう意味では日本開発の仕事として、私は紀和町の方が印象に残っています。

庄司 そうですね、紀和町は瀬流荘が一つと、上川地区の活性化調査をやりましたね。紀和町の周辺の観光資源開発、



日本開発研究所三重会長
(庄司博彦前所長夫人)
庄司乃ぶ代

千枚田も関係してくると思います。

今井 瀬流荘の周辺のネットワークについては、飯高町ほど計画通りではないでしょうけれども、でも随分できましたね。鉱山資料館もできましたし、そういう意味ではうまくいっていると思います。あのようなプロジェクトが、日本開発の能力を発揮できる場所ではないかと思っています。

富田 今の瀬流荘の話ですが、私は県の紀南県民局長をしていました。きちっと仕事が残っていることはすばらしい成果だと思います。

庄司さんは思いつきではものを考えない方でしたよね。議論をふっかけにきてすぐには答えませんから。じっくり聴いてからきちっと答える。飯高町も紀和町もそのような形でまとめられたのではないのでしょうか。相手に言われたから変える、だめだと言われて直ぐ変更することはしない方でした。

今井 積み上げていくということを常に考えておられましたね。

地元のコンサルタントとしての安心感

富田 今の時代に コンサルという名前はたくさん出てきましたが、ひとつのパターンの中で仕事をやって、固有名詞を置き換えればどこでも同じレポートになる。そして最後はお金ですべて解決する。そこには知恵がないですよ。コンサルは知恵を売るわけですから、みんな同じ知恵ばかりでは買う方がたまらない。

今井 コンサルではなく、不動産会社の企画部みたいなコンサルもあります。一時期多くのコンサルがそのようになっていたのは確かです。今の時代もそうかもしれませんが、コンサルの職能というものをきちんとしなければいけないですね。頼まれて仕事をやるわけですから、やはり自立した職能としてのスタンスを常に持ち続けなければならないですね。

庄司 とにかく手を抜いてはいけないということです。契約金額には関係なく、どなたかに「それではボランティアだ」と言われましたけれども、引き受けたからにはとにかく誠心誠意手を抜かないで緻密な仕事をしなければならないということは常に前所長が言っていましたね。だから、今の吉田所長をはじめ社員は皆、しっかりと仕事をできるように育ててくれたのではないかと考えています。

会社が軌道に乗ってきたところで、前所長さんが体調を悪くされ、奥さんはさぞご苦労があったか

と思いますが。

庄司 本人自体ががんばっておりましたし、本人は病気に対しては淡々としていて、なるようにしかならないだろうというような、気持ちはありました。亡くなる2、3か月前でも、また元気になって仕事がやれるのではないかというような、楽観的でした。

今井 悟っていらしたんですね。

庄司 悟りではないと思いますけどね。仕事にもすごく打ち込んでいたという感じです。仕事量は却って多くなりましたね。それと、ある程度研究所の基盤をきちんとしておかなければならないという気持ちもあったかと思っています。

今井 県にしろ市町村にしろ、プロジェクトの予算の取り方は多分違うとは思いますが、この仕事は東京のコンサルに頼むよりも、地元で頼む方が良い、ある意味では中央と地方の棲み分けかもしれませんが、日本開発には地元の安心感があるのでしょうかね。

ペーパーだけ書いても積み上げておかれては駄目ですからね。それに魂を入れるのは行政の職員であり、その魂を育てないとそこから何も出てこないわけですよね。だから、日本開発との仕事を通じてきちんと付き合った行政の人たちは、ファンになっておられる方が多いでしょう。つまり、行政の人のモチベーションを高めるということになったでしょう。

富田 やはり人脈は生きていますよ。日本開発の人が市町村を回られて、この20年間で大変な人脈ができています。

庄司 そうですね。ずっとお付き合いして下さる方が多いですね。それに、当初かかわった担当者が今は県やそれぞれの市町村で中堅、あるいは中堅以上になっておられますからね。

富田 中には町長になっておられる方もみえるでしょう。そういうところで日本開発研究所流の何かと新しいことを発想する人間が育てられているかも知れませんが。

今考えると、私は本当に庄司さんに仕事を教わったなあと思いますね。何かあるとすぐに県庁から駆け下りて事務所にとび込んで行っては、知恵をただで借りていましたね。松阪木綿の田畑美穂さんから、「知恵はただではないよ、饅頭くらい持って行ったら」と言われたりしました。

庄司 でも、やはりそれがコンサルの本質ではないかと思っています。それに今は社員もずいぶん増えました。身内のことですが、本当に良い方がきてくれてありがたかったと思っています。育て甲斐のある人材が集まったなあという気がします。前所長が具合が悪

くなり、そして亡くなったこの一年、本当にみんながんばって良い仕事をやってくれていたと思います。これは庄司の大事な宝、置き土産だと思っています。

専門性、地域性、先見性

時代のテーマに対して「地元」のコンサルは何をやっていくべきですか。

今井 難しいですけど。コンサル業って無資格なんですよね。建築事務所の方は一級建築士とかの資格があって、一級建築士は排他的で独占的なものですよね。ところがコンサル業というものは今のところは何もないわけです。技術士については、あればもちろん良いけれどもなくてもできるという意味では、全く独占性も排他性もないわけです。そういう意味で、コンサル業は非常に大変な時代になってきていると思います。今までの人脈も含めてストックがなんといっても大事です。やはり専門性というようなことが必要ですね。それも確たる専門性が、このことだったらともかくあの研究所に頼む、何か聞いてみようという専門性を持っていることが大切です。そして、その専門性をアピールできるような仲間づくりをしていくということが大事かとも思います。

もう一つは地域、三重県全体ではなく三重県のある所でもよいのですが、ここは100%知っているというか、地域性の専門性ということが大事です。何度も前から言っていることですが。オリジナルなデータを持てば必ず、「これは是非あそこでやらなければならない」という風なことになってくるのではないのでしょうか。現にそうなってきていると思います。

また、頭脳労働を安ければ良いという入札で決めるなんてことは、誰が考えてもおかしいなと思ったりもしています。

富田 一つは、今までの積み重ねてきた実績をどうPRしていくかということ。これは企業にとって大変大事なわけで、今まで庄司さんがやったことを、「日本開発研究所はこれも手がけたのか、あれもそうか」というようなところを、競争原理とか公開性とか、いろいろなことをやかましく言われているけれども、やはり情報として流す。そうすれば他社との競争に絶対に勝てるわけですよ。実績があるわけですから。今度社外報を

出すということは、やはり大事だと思いますね。もう一点は、建築物なんかはすごく変わってきた。建築にしても町を作るにしても、どんどん変化していく。だから市町村合併という問題でも、これは大変だなあと思いながら企画面ではおそらく合併前と後の変化のこと、将来どう変わるのかということ、先見性というか、やっぱり見据えておかないと、そこにコンサルの存在価値があると思います。

庄司 おっしゃるとおりです。市町村合併をとりあげても、住民の方の生活が大きく変わる。今のやり方はやっぱりアメとムチで上意下達と言われています。ところがその一方で、住民参加、住民参加と言うわけですよ。ですから、住民側からみた市町村合併の進め方を地元のコンサルとして、民間コンサルとして提案していこうということ、この間それを私どもの吉田所長にまとめてもらいました。こういう動きはもう少し評価してもらってお役に立ちたいと思うんですけどね。

最後に庄司会長さんにまとめをお願いします。

庄司 私は今の方向は、良い方向に行っていると思っています。庄司も亡くなるまで、やはり何か専門性とか、確たる自信を持ってものが言える分野を会社に根付かせたいというのを暗中模索しておりまして、なかなか達成できないで逝ってしまったんですけども、それを引き継いで、吉田所長や館部長が新しいものを何とか自分たちで取り入れていこうと努力をしております。本当に良い方向に行っているなあと感じております。今日は、お二方お忙しい中有難うございました。今後ともよろしくご指導、ご支援をお願いします。私たちも頑張ります。

(聞き手 日本開発研究所三重代表取締役 大原久直)



「飯高町地域活性化調査」にて、中央は庄司前所長

「住民に見える」市町村合併の



(株)日本開発研究所三重

代表取締役所長 吉田昌弘

住民に見えない議論

「市町村合併の主役は、『地域住民』であるべきだ」という指摘をよく聞く。住民の無関心を基盤に合併の議論が進むことを懸念しているのである。確かにこれまでの合併論議は、行政や財政などの観点で語られることが多く、その内容は、合併の一般的なメリット・デメリット論に終始している。しかし、合併のメリットとして客観性が認められるのは、「行政組織の強化」に尽きると言ってよく、その他は、合併の如何にかかわらない課題ばかりである。

住民がこのような行財政中心の議論に加わりにくいのは当然であり、実感の湧かない情報や議論の場が提供されても、自分たちの問題として捉えることは難しい。結果として多くの住民が無関心か、一方的に進められていることへの反発を感じるかのいずれかで、まちの将来に対する積極的な議論はなされないままになってしまう。

市町村合併は、「地域や暮らしを変える」ためにある

地方分権推進委員会は、1995年の中間報告のなかで地方分権型行政への転換によって、次のような自治・分権の道筋を描いた。

- 1．国・地方の関係が変わる
- 2．自治体が変わる
- 3．地域や暮らしが変わる

地方分権とは、この最後の「地域や暮らしが変わる」ために、国、府県、市町村と住民の自治組織の間で、適切な役割分担を再配分する一大事業である。市町村合併はその一環として、「自治体が変わる」ための手法に位置づけられる。

今、「自治体を変える」ことと並行して、自分たちの「地域や暮らしをどう変えるのか」を議論すべきであり、そこにこそ、より多くの住民の主体的な参画が望まれる。

「住民に見える」テーマ

「地域や暮らしをどう変えるのか」を議論するために、「住民自治の将来像」、「都市づくりの将来像」の2つのテーマを提案する。

は、基礎的な自治組織の強化を目的に、自立したコミュニティに

議論に向けて

において「どんな暮らしを実現したいか」そのために、「自分たちで何を決め、何を実行していくのか」話し合い、あわせてまち全体としてそれを受け止めるしくみづくりを行うことである。また、は、めざすべきまちの将来像を、目に見える「都市計画の視点」から捉え、公の場で議論していこうという提案である。

「住民自治の将来像」の議論に向けて

住民自治の充実強化は、合併において懸念される多くの弊害を取り除くとともに、新しい住民自治の芽に対応した自治体の形成をめざすものである。

今、NPOが公共サービスを担おうとしている。NPOは住民自治の新しい形態の一つと捉えられるが、自治会などの旧来の自治組織と違い、地域的な広がりが多様である。このようなNPOを含めたコミュニティの連合体としての体制と、活動しやすい区域を持つことが、新しい時代の自治体には相応しい。そこで、個々のコミュニティの役割と目標を明確にすることこそ、住民の側から積み上げる合併論議の主テーマとなるべきである。

「都市づくりの将来像」を議論するために

言葉だけのイメージや行政文章的な計画では、地域の将来像の議論が活性化されない。目に見えるビジョンとして、都市計画からのアプローチが必要である。「合併によってどのような都市づくりが必要、または可能となるのか」、さらに「21世紀のあるべき都市像」について、具体的な都市整備の中身や先進的な都市づくりの提案を提示して話し合う必要がある。

地域密着型のプランナーの役割

「住民に見える」議論に向けて、我々、地域密着型のプランナーの責務を実感している。

住民の自治組織は、地域の「草の根的自治活動」の実態を把握し、地域の実情に応じた形態を見いだす必要がある。そして、個々の身近なまちづくりを起し、活動を継続していけるよう、かかりつけの医者のように常にまちを見つめる専門家としての役割がある。

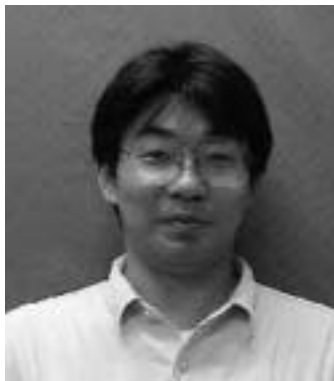
また、「都市づくりの将来像」の構築は、多くの住民を議論に引き込み、住民の考えや熱意を地域に息づく風土や個性に照らして、具体的な形にすることである。そしてそれを既成制度のなかで実現できるスキームとして組み立てるプランナーの役割がある。

市町村合併の主役は、地域住民であるべきだ。しかし、市町村合併の速くて大きな流れのなかで弱者の声は届きにくい。だからこそプランナーは、地域に根付いて、耳を澄まし、声なき声を聴き取る姿勢が必要である。そして、地域の小さな声を反映していくための民主的な合意形成のあり方を提案していきたい。

ブロードバンド普及元年における

イーアクセス㈱企画部長
㈱日本開発研究所三重取締役

庄司 勇木



ブロードバンドインターネット爆発の予兆

2001年は日本のインターネットの発展において記憶されるべき年である。これまで高い、遅い、使えないという三重苦によって普及を阻まれていた日本のインターネットユーザに、常時で高速の接続環境が手に入る、革新的なサービスが登場したからである。

ADSLという技術である。これはすでに敷設されている電話線にデータ信号を重畳させて各家庭まで伝送する技術であり、利用者は電話線さえきていれば、モデムの簡単な取り付け工事で数メガの高速インターネット環境を手に入れることができる。また、電話網を利用しないので、料金も定額であり時間を気にせずに利用できる。

通信インフラの整備にもっとも手間とコストがかかるのは、ラストワンマイルと呼ばれる電話局から家庭までの電線工事である。この技術の秀逸なのは、すでに敷設されている電話線を利用するために、もっとも手間とコストのかかるラストワンマイルへの投資が不要となることであり、サービス展開が迅速かつ経済的にできることである。昨年末に複数の事業者がサービスを開始してから、2001年8月末ですでに50万回線が開通しており、2002年3月末には200万回線を超えるものと予想されている。

ブロードバンドインターネットがもたらすもの

インターネットが高速でかつ定額になれば、どんなよいことがあるのだろうか。実はこれに対する答えが明確になかったことが、ブロードバンドの普及を遅らせたもっとも大きな理由の一つである。

携帯電話もそうだった。最初は誰もがそんなものは必要がない、四六時中呼び出されるのはまっぴら、といった反応が多かったのが、普及してみれば誰もが手放せないものとなった。かつては一息つける際にタバコを吹かす人が多かったが、今では多くの人が手元にある携帯電話の画面をのぞき込む。

我が家にADSLが来たのは今年の2月であった。最初は休日にたまに使うぐらいだったのが、今では夜遅くに帰宅しても自然にパソコンのスイッチに手がのびる。インターネットを毎日利用するようになってから、情報源としての新聞の必要性を感じなくなってしまった。今、

地域情報化の課題

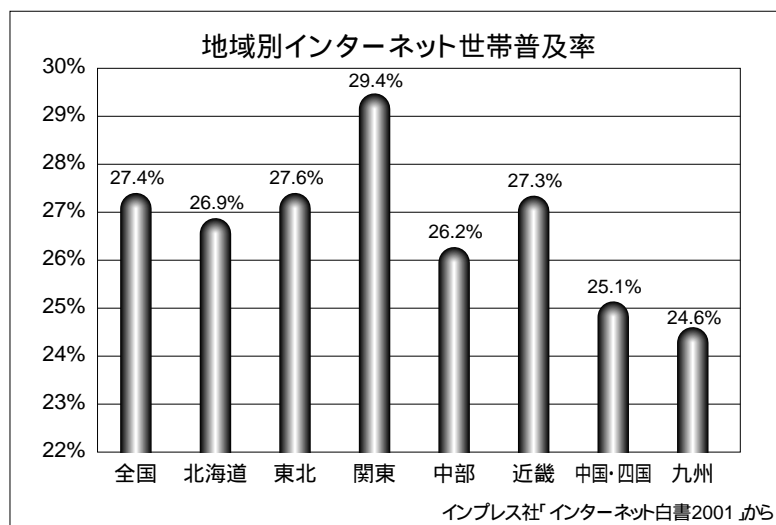
日経新聞を取っているのは特集記事と私の履歴書を読むためだけである。また、9月11日に起こったWTCテロ事件以来、テレビニュースも必要性を感じなくなってしまった。アメリカのABCNEWSのサイトをのぞくと毎日必ず最新のニュース映像がアップされている。出張に行くときも目的地と着きたい時間を乗り換え案内のサイトに入力すれば、瞬時に乗るべき電車と所要時間を教えてくれ、宿泊先の予約もできる。また、かつてはこれらの便利なサイトがあってもそれがどこにあるのか探すのが大変だったが、Yahooをはじめとした有名ポータルサイトにいけば、便利なサイトにすぐにたどり着ける。

携帯と同じである。使いだしたら手放せない。そういうものなのである。

広がるデジタルデバイド

このようなブロードバンドインターネットは、待っていたら直に全国どこでも利用できるようになるのであろうか。携帯電話の場合、郵政省が携帯事業者に免許を与える条件として、地方エリアをカバーすることを義務づけた。したがって全国ほとんどの場所で利用可能となった。しかし、ADSLのビジネスは都市部から離れると採算性が悪くなるため、NTTでさえ主要な市部でしかサービス展開を約束していない。

ブロードバンドインターネットがもたらすIT革命がマクロ経済にどのようなインパクトをもたらすか定説はないが、90年代後半のアメリカの繁栄はIT革命による生産性の向上によるとの意見は根強い。グラフが示すように、インターネットの普及率は東高西低になっており、地方において格差が開きつつあることは確かである。2001年は日本でのブロードバンドインターネット普及の元年であるが、同時に情報化における国内での南北問題の始まりなのかもしれない。地域での知恵が問われているのである。





関町
●
「関宿」



歴史的町並み 保存の 新たな手法

嶋村明彦氏
関町教育委員会
町並み保存係 係長(技師)

鈴鹿郡関町の中心的集落である関地区は、江戸時代には東海道五十三次の宿場町「関宿」として栄え、現在でも往時の面影を残す歴史的町並みが残ることから、東海道の宿場町としては唯一、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。

保存地区は中央を通る街道に沿って東西約1.8キロメートル、25㍍の広さがあり、街道に面する建造物も400余棟を数える。関町では、町並み保存条例が制定された昭和55年以来、個々の伝統的建造物の修理・修景事業を中心として、地区の歴史的景観の整備を進めている。

保存地区の整備において最も重要な点は、地区の歴史・文化をどのように理解し、これを十分尊重した上で個々の事業を立案し、進めていくかにある。関町では保存審議会を設置して、建築学、歴史学、民俗学等、専門的な立場からの指導・助言を得る形をとってきたが、事業の進捗とともに住民意識も高まってきており、住民参加を進めていくことが必要となっている。

そもそも、重要伝統的建造物群保存地区の制度は、地区毎にその特性を活かした保存条例や保存計画の策定が行われるなど、町並み保存に対する地区住民の参加を前提としている。また、住民にとっても、事業の立案や実施の過程に参加することは、保存理念や計画手法などを実践的に学ぶ絶好の機会となるのである。

すでに、保存地区内の防災型ポケットパーク整備計画(平成8年度)や第4次関町総合計画策定(平成11・12年度)等、計画に関わる分野では実験的な取り組みがなされているが、今後は伝統的建造物の修理手法や空き家・空き地の問題など、専門的な知識を要すると考えられてきた分野においても、地区住民が積極的に関わっていけるような、新たな手法の実践が急務となっている。

関町では、これまで鈴鹿馬子唄会館や鈴鹿峠自然の家の登録文化財指定へと展開した「坂下まなびの森」や「第4次総合計画」の策定などにかかわらせていただきました。

また、関宿では、街道の様々な環境整備にたずさわらせていただきました。なかでも「百六里庭」(防災型ポケットパーク)は、三重大学浅野研究室と共同して、住民の方々が中心となってワークショップでデザインを考えたものであり、三重県では初めての試みでした。関宿の家並みを一望できる「眺関亭」など、素晴らしい住民のアイデアが盛り込まれています。昨年には、関宿の空き家・空き地対策について、町の対策グループの方々とともに議論にも参加させていただきました。

仕事を通じてだけでなく、関宿町並み保存会の活動や遠方からの来客の案内など、日頃から関町のまちづくりについて話をさせていただく機会が多く、大変お世話になっています。

(日本開発研究所三重)

尾鷲市 ● 「熊野古道」



熊野古道を 歩く

川端 守氏
尾鷲市「会議くまの道」会長

旅の形が変わって来ているように思われる。旅に求めるものに変化が見られるのだ。高度経済成長期に見られた、団体での宿泊宴会型の旅行から、山を歩き、峠道を歩き、自然の中にある空気や光や石畳やらに心のやすらぎを得ようとする方向に変わって来ているように思われる。

全国の古道や歴史の道を歩きつづけて来た「熊野古道」(岩波新書)の著者、小山靖恵さんは、講演の中で、「熊野古道は日本一の古道です。馬越峠の石畳の道は、日本一の石畳道です」と強調しておられたが、その馬越峠をはじめ、熊野古道伊勢路の最大の難所と言われ八鬼山越え、曾根太郎坂・次郎坂、さらに最近発掘された三木峠越えなど、当尾鷲市には、熊野古道が江戸期に整備されたとほぼ同様な形で残されている。

馬越峠でいえば、年間五万人近い人々が、春夏秋冬、絶えることなく歩きつづけている。その多くの人が、「なかなか気持ちのいい道でした」との感想を寄せて下さる。

案内板や休憩所等も整備され、熊野古道の道々は、旅の中にやすらぎを求める人たちを待ちつづけている。家族で、あるいはグループでぜひ一度お出かけ願いたい。

尾鷲市は、日本開発が最も古くからお付き合いいただいているまちのひとつです。

「大曾根浦埋立地計画」などの三部作が平成2年。創業間もない昭和56年、南海日日新聞さんとアンケート調査を実施したのが、最も古い業務です。その後も、地域住宅計画、観光振興計画、モデル商店街計画などと、継続的にお世話になり、現在、新たな総合計画の策定をお手伝いしています。

日本開発は尾鷲に縁が深く、当研究所の大原は尾鷲育ち、吉川は三木里の旧家の出身です。他の研究員も、今は議論の最中に思わず尾鷲弁がとび出すほどです。

熊野古道は、この2、3年で来訪者が急増し、私たちが実施した「東紀州体験フェスタ」評価業務では、その資源性の高さに驚きました。そうした折、熊野古道を含む「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界遺産の暫定リストに名を連ねられ、さらに脚光を浴びようとしています。「会議くまの道」のみなさんをはじめ、保存活動をされている方々の努力の結晶であると、敬意を表したいと思います。

(日本開発研究所三重)



熊野古道「八鬼山」

浜島町・「伊勢えびと温泉の町」



伊勢えび祭り

伊勢えびと温泉の町

谷水金岩氏

浜島町教育委員会次長

日本開発研究所三重20周年、浜島町からもおめでとうと祝福したい。

浜島町は、志摩半島の南端、英虞湾の入り口にあり、名古屋市から100km、大阪市から125km圏域にある漁業と観光のまちである。施設園芸も盛んで、大正時代から作られている南張メロンは有名である。

近年は、伊勢えびと温泉の町として脚光を浴び、初夏の伊勢えび祭には近県から大勢の人が訪れている。

私と日本開発研究所三重との出会いは、総務課財政係長時代（昭和61年）、伊勢志摩広域市町村圏の計画書を策定するにあたり、そ

の勉強会の講師として庄司前所長さんを紹介された記憶がある。物静かな学者タイプの方といった印象を覚えている。

平成元年浜島町に企画課がはじめて単独設置され、企画課に配属され考えたことは、地域づくりの基礎的条件は土地であるということだった。そこで、都市計画の専門家である庄司前所長さんを思いだした。

すぐに、浜島町の土地資源について分析し、地域の持つ制約条件やポテンシャル等の基礎的条件を見つめ直したいと前所長さんに思いを伝えた。そして、当時の係長クラスの職員で「浜島町土地利用構想プロジェクトチーム」を立ち上げ、前所長さんや研究所の若手に加わってもらい、勉強会をしながら報告書をまとめた。

このとき、「課題の見つめ方」、「地域分析の手法」などを学び、一緒になって取り組んだことは大変勉強になった。当時、研究員だった吉田さんが中心となり浜島町をくまなく歩いていただいたことも、浜島町の理解者が増え、以後我々のシンクタンクとして、何かと意志の疎通が楽になり相談に乗ってもらえた。

以来、この報告書と策定において培った蓄積をまちづくりに生かし、総合計画の策定などにも知恵をお借りした。「今年のキーワード探し」や「浜島町の一番大切なものは何か」、「アンケート調査とその限界」など、議論したことを思い出す。今後とも浜島ファンの一員として、浜島町の将来を見守っていただきたい。願います。

チャンチャチャンチャチャン

チャンチャチャンチャチャン

チャチャチャチャチャチャチャ

当研究所の職員有志が「伊勢えび祭」の「じゃこっぺ踊り」へ飛び入り参加させてもらうようになって数年。5月も半ば過ぎになると「じゃこっぺ踊り」のリズムとメロディが頭のなかについて離れなくなり、6月初頭、引き寄せられるように浜島の地に足が向かってしまいます。

浜島町とは、これまで、「土地利用構想」にはじまり、「都市計画マスタープラン」、「生活排水対策推進計画」、「介護保険計画及び高齢者保健福祉計画」の策定など、まちづくりの様々な面においてかわりを持たせていただきました。平成11、12年度には「第4次浜島町総合計画」の策定にも携わらせていただきました。

今後も、浜島町の良さを心から満喫させていただきたいと考えています。

(日本開発研究所三重)

風土を活かす地域づくり

住民と行政がともに行動を

三重エフエム放送社長
(元中日新聞社三重総局長)

八橋隆之氏



津市に住んで10年。仕事から県内を歩きますが、生活するにはとても環境がよいところだと思います。山あり海あり田園あり。ただなんとなく風景を眺めているだけで、気持ちがいい。そして豊かです。米どころ、お茶どころ、おいしい肉に、新鮮な魚介類。そしてうまい地酒。

県庁所在地の津市は転勤族の街ともいわれますが『老後は三重で』と、また戻って来る人が多いと聞きます。気候は温暖、人柄も温和です。美(うま)し国 といわれるように伊勢の国は太古の昔から、住みよいところだったのです。

日本は高度経済成長期を境に、様相が一変しました。車社会の到来とともに、生活は豊かで便利になったかわりに、山村は過疎化。町は騒音と排気ガス、ゴミの山。そして商店街の空洞化。清流は姿を変え、白砂青松の海岸の風景も変わりました。

三重県でも、程度の差こそあれ、深刻です。三重県にはまだよい環境が残っているといわれますが早く対策をし

ないと、われわれ県民の貴重な財産が失われてしまいます。子や孫に、その貴重な財産を残すのが、いまのわれわれ大人たちの責任だと思います。

2年程前、鈴鹿・亀山生活創造圏ビジョン作りのメンバーとして鈴鹿川を河口から源流まで見て回ったことがあります。その地域にはその地域にしかない良さがあり、永年住んできた、名人といわれる知恵者がおられます。いま『里山づくり』や『清流を呼び戻す』勉強会が、県民局を足場に始まっています。

自分が住む地域を、どう良くしていくか。慣れない仕事だし、個人の力には限界がありますが、みんなが集まって知恵を出し合い、専門家のアドバイスを動員しながら、最後は住民側と行政がいっしょになって行動することが大切になると思います。

日本開発研究所三重のこだわり

日本開発研究所三

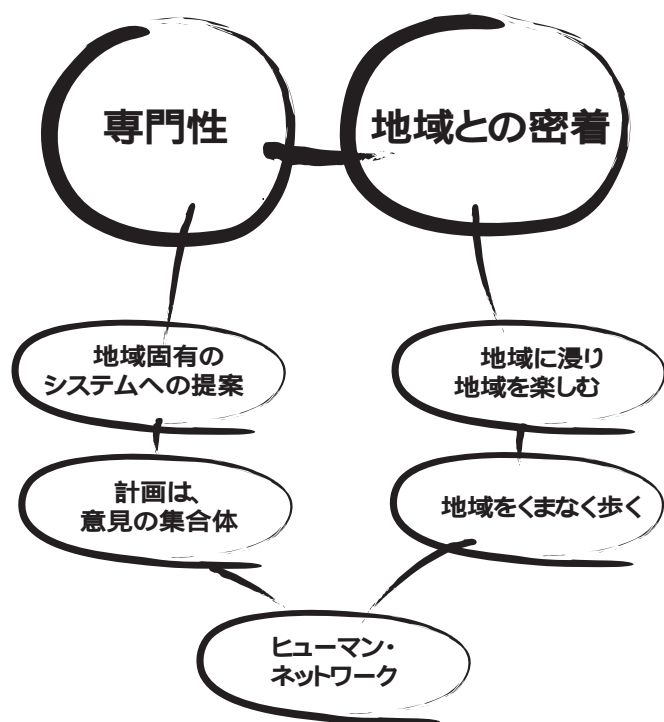
Prud Institute Me

日本開発研究所三重がかかわると、まちが、行政が、住民活動が、企業が輝きを増す。そう言われることが、わたしたちの目標です。

もちろん、わたしたちが光を与えるのではなく、地域が輝くのです。

最も大切なのは、地域が潜在的に持つ力 風土、資源、人材、技術などが持つ力 を地域の総合力として発揮してもらうことです。そのために、わたしたちは、主に行政を支援する立場から、かかわらせていただいています。

地域の潜在能力を十分に発揮していただくために、わたしたちが日頃から大切にしていることが2つあります。1つは「専門性」、もう1つは「地域との密着」です。

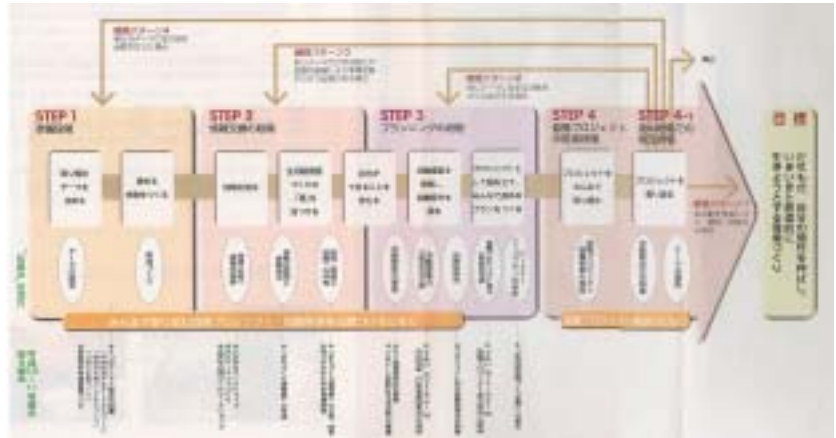


ここでは、大切にしているこの2つのテーマを具現化するために、わたしたちが行っている「5つの実践」をご紹介します。

1. 地域固有のシステムへの提案

時代が移ろう以上、普遍の社会システムなどあり得ません。わたしたちは、地域づくりのなかに、時代や地域に合った社会システムを組み込むことができるよう、「専門家」の立場から提案を続けています。

それは、単に方法論を地域に持ち込むのではなく、地域固有の文脈を読みとり、地域に適したしくみとして提案することです。



「生活創造圏づくり」では、協働の「新しいしくみ」づくりに取り組みました

2. 計画は、意見の集合体



計画づくりはプロセスがたいせつ、日本開発研究所三重の成果の数々

計画は、ひとりでも多くの人のコンセンサスが得られなければなりません。そうである以上、プロセスが重要になります。

情報が溢れ、住民ニーズが多様化するなかで、様々な意見を集約することは、専門的で高度な技術を要します。もちろん、住民の意見だけでなく、行政内の意見集約についても同様です。

わたしたちは、地道でかつ時間のかかるこのプロセスを重視し、きめ細かい計画づくりを指向しています。

3. 地域に浸り、地域を楽しむ

創造的な発想を地域に持ち込むためには、地域を楽しむ心、時には良い意味で遊び心が必要です。わたしたちは、研究所としても、個人としても、魅力的な地域にかかわりを持ちたいと思っている人間ばかりです。

その地域に浸り、自らまちづくりをやってみようと思う。そうして常に自分たちの地域、「地元」という気持ちを抱きながら、苦勞も楽しみに変えてしまうのが、わたしたちの特技でもあります。



時には自たちも地域づくりの活動に参加して

4．地域をくまなく歩く

地域に埋もれている資源、これは、実際に現地に行ってはじめて分かるものです。土地の歴史を調べ、現地を歩き、地域の暮らしを見つめることから、地域づくりの仕事は始まります。そして常にいいものを見抜く眼力を鍛え、感受性を磨いておかなければなりません。



フィールドワークの結果を持ち寄って議論

わたしたちは、どんな業務であっても、「現場主義」による発想を大切にし、単に「頭で考える」だけでなく、「足で稼いで心で書く」ことを実行しています。

5．ヒューマン・ネットワーク

以上の4つを実践していく上で欠かせないのが、「ヒューマン・ネットワーク」です。

わたしたちは、それぞれのスタッフが得意分野を持ち、研究所としてバラエティに幅を持たせています。さらに、大学の先生をはじめとする多くの方のご指導、ご支援によって、「専門性」に広がりを持つことが可能になっています。



三重大学浅野研究室と共同して
「上野市の城下町」まちづくりに取り組みむ

一方、地域においては、地元の人々との連携を大切にし、地域の専門家との共同にも力を入れています。

わたしたちは、このヒューマン・ネットワークを活用し、地域の能力、わたしたちの能力を、最大限に発揮できることをめざしています。



三重大学今井研究室、地元の建築家と共同して
「尾鷲の家」づくりに取り組む

以上の考えを胸に、どんなご相談にも応じられる「ホームドクター」として、「知恵の地場産業」として、「地域に根付くコンサルタント」として、地域に貢献していきたいと考えます。

風土を活かす地域づくり

「日本開発研究所三重」への期待

松阪木綿振興会顧問
(元三重県立博物館長)

田畑美穂氏



近ごろ、“地産地消”ということが今さらのようにいわれているが、まだ半世紀ほど前には、ほとんどの、とくに食料品は“地もの”だった。

とりわけ伊勢平野に住む者は、海にも山にも恵まれていて、特別の場合でもない限り、ふだんは、みんなが呼吸している空気の中で、やはり同じように井戸からくみ上げる水と変わらない水で育った野菜や柿、みかんなどを食べていたわけだ。

まさに風土、その中で“生物として”長い年月営んできた暮らしが、その地その地の文化を生んだが、それもまた“地産地消”。

毎年行われるお祭りなどの習俗も、そこに住む者どうしが、飲み食いを共にすることにより、平素はとかく忘れがちな共同体意識や、ややもすれば失いがちな郷土愛といったものを、結果としてよみがえらせる機会になったとしても、終始地元だけで消費される文化であり、観光資源などとはとんでもない考えだった。

ところで、日本開発研究所三重の故

庄司博彦さんとは、ご尊父で元松阪市長・桂一先生との、切っても切れないご縁により、まだ子どもさんのころからのお付き合いである。

しかし、仕事の上での関わりは、わずかに飯高町と尾鷲市の観光基本計画ではあるが、その間に受けたお人柄からくる洞察力と、とりわけ“地ダネ”を優先し尊重される発想には教えられるところが多く、数あるいわゆるコンサルとはたいへん違った取り組み方なものには敬服した。これはぜひ受け継いでもらいたい。

古い日本の言葉で、それぞれの地域には、「国魂(くにたま)」というその地ならではのスピリッツがあるとされるが、庄司さんは理屈よりも感性で、血の通った地域づくりを考えた人だ。

だから地元の資料やデータをいやという程用意されて、その中から核心になるものを読みとるという手法であった。

いわゆる“地方分権”もこういう視点から発し直さなければならぬと思う。

こんにちは



吉川千香子

三重県出身（三重県南部に縁深し）、1男1女の母、
趣味：テニス、ガーデニング

日本開発にお世話になって、10年以上がたちました。会社にもいろいろな変化があり、私自身も、結婚、出産と大きな変化がありました。2児の母になってみて、福祉、教育に関してもいろいろと深く考えるところが出てきました。そういった点も今後の仕事に生かしていければと思っています。



三好 綾子

香川県高松市出身
趣味：ドライブ、海外旅行

4月の入社以来、まだまだ仕事を覚えつつ三重県を奔走しています。所内ではただ一人、地元の出身ではありませんが、ここ数か月間仕事で多くの市町村をまわっているうちに、三重県にずっと住んでいたかのような気がしています。まだまだ初めて訪れる市町村も多く、最近では休日の度に県内を探検しています。これから地元に着した仕事ができるようになればと思っています。

編集後記

日本開発研究所三重の社外報、「think-mie」創刊号をお届けします。当研究所は昨2000年（平成12年）が創立20周年の記念の年でした。そこで、この20年間、当研究所をお引き立て下さり、また、ご支援、ご指導下さった県や市町村などの皆さんに感謝を申しあげべく、記念事業の開催を考えていました。ところが、当研究所創立者の庄司博彦・前所長が、昨年10月に急逝、やむなく記念事業を見送りました。

そこで、それに代わる事業として、社外報を発刊することといたしました。おそらく、三重県で唯一生え抜きの、地域計画、都市計画、社会政策等の民間コンサルタントとして20年、その間の当研究所の歩み、実績は、本号庄司会長（故・庄司前所長夫人）との鼎談のなかで、三重大学教授今井正次氏、津駅前都市開発株式会社専務富田茂氏がこもごも語って下さいました。

創刊号の発刊に当たって、ニューヨーク大学行政研究所上席研究員の青山公三氏は、はるばるニューヨークから、心のコもった巻頭言を送って下さいました。また、三重エフエム放送社長八橋隆之氏、当研究所顧問田畑美穂氏は、さわやかで、また今後の当研究所にとって励みになるお言葉を寄せて下さいました。お三方とも、故・庄司前所長がご親交をいただき、また今も当研究所が何かとお世話になっている方々です。厚くお礼を申し上げます。

創業以来、当研究所が仕事をさせていただいた市町村のなかからは、尾鷲市、関町、浜島町の話などを、まちの方と当研究所の研究者との共同執筆で掲載しました。市町村紹介のコーナーは、今後も連載する予定です。ご投稿をお待ちしています。

もの書きを仕事にしながら、創刊号のこととて意欲ばかりが先走り、追い込みの段階になって時間に迫られ、ついに専門家の助けを借りました。シード・プランニングの千種さん、新日本工業の加藤さん、カメラマンの阪本さん、有難うございました。

（編集担当 ○）

think-mie 創刊号

発行 平成13年10月21日
発行所 株式会社 日本開発研究所三重
〒514-0006 津市広明町121-2
TEL 059-224-4316(代)
FAX 059-224-4319
E-mail info@think-mie.co.jp
URL http://www.think-mie.co.jp

 **株式会社 日本開発研究所三重**



この印刷物は古紙配合率100%再生紙と
環境にやさしい植物性大豆油インキを使用しています。